

隨想

郷土史バカ六十年

宇佐郡安心院町且尾

會員、大隈 米 陽

(七十二歳)

〔紹介〕

この一文は去る三月三十日付、大分合同新聞の朝刊「読者の声」欄に掲載されたもの。大隈氏の人となり、郷土の歴史や文化に対する執念が何と、全會員に読んで頂きたい。新聞社及び大隈氏からの解を得て、全文をそのまま載せることにした。なお、大隈氏は昭和十一年中、四回にわたって「秋月楠門と賀来飛霞」の題で、その交友を密表下さっている。

(羽柴)

小学校二年生の秋、村の鎮守の祭典で楠正行の絵本を買ってもらい、その美しい絵と文章に魅せられ、「楠正行」と題してつづり方を書いて、先生から大層ほめられた。また六年生の時、青木文学士の名著「大日本歴史集成」五巻を、図書室から借り出して愛読したのがやみつきとなり、僕の郷土史修行が始まった。

他の学科の勉強はいよいよやむを得ずであったが、歴史だけは興味津々で、試験はいつでも満点であった。文学少年のおきまりのコース、蘆花の「自然と人生」に始まり、兄蘇峰の名著「近世日本国民史」を、逐次小遣いさためては購読した。

大正十年刊行の小野龍胆先生の「宇佐史談」第一号からの読者であり、その史跡探訪には形影相伴った。「下

毛郡史」の赤松翠陰は遠縁に当たると関係から、その十数冊の著書も愛読した。

僕は足一たびも郷閭を出ず、兵隊にも戦争にも行かず、農家のくせに郵便局、村役場、農協と遍歴を続けた。郷土が大分県に編入されて百年にしかならないが、豊前国としては一千年以上を経過している。それなのにまとまった豊前史研究がないのは残念である。

そこでせめてと数十年前から両県で刊行された郡誌、市町村誌を集めて、今や数千冊に及んでいる。中央の史学雑誌、歴史、地理、民間伝承、中央史壇等も購読したが、地方誌では大分史談、臼杵史談、杵築史談、中津史談、小倉の郷土、豊前、宇佐史談、豊日史談、大分県地方史、佐伯史談と、目にかかるとだけ読んだ。

世間に公表するほど自信のある著書もないが、佐田郷土史、宇佐山郷先達伝、北豊郷土史年表、安心院町誌(共著)と活字にしてみた。

要するに郷土史バカで、六十年といふところである。馬齢を加えて七十二。幸い、目下健康なので、あと数年のうちには何かまとめたいと、原稿用紙に秀(とく)筆を架している毎日である。

(おわり)

「温故知新」の語意について

(読者) オンコチシン 故きを温ねて新しきを知る

(意義) 昔の古いことをたずねしらべて、今の新しいことを正しくたずねることが出来る。原振は「論語」

の為政篇にある「温故而知新、可以為師矣」にある言葉である。